

## 子どもたちはみんな良い子

近年、親子の会話の不足、親子の断絶などが話題となっています。一日のできごとなど子どもとの会話を多くし、温かい心の通いあう家庭であって欲しいと思います。

次に紹介するのは、昨年、少年の主張島根県大会での発表です。これを読んで、親子の関係について考えてみましょう。



発表する高梨君

「僕の夢」

西郷中学校 3年 高梨 敬史君

「僕は、今でも母と一緒に風呂に入っています」こう聞くと、人はどう思うでしょうか。みなさんはどう思いますか。僕は今まで、その答えを聞くのが怖くて、誰にも話したことがありませんでした。けれど、僕は今でも、母と一緒に風呂に入っています。それが、僕の役割だからです。僕の母は、重い障害をもっています。一人では何もできません。ご飯を食べることも、

服を着替えることも、お風呂に入ることもできません。だから僕は、母と一緒に風呂に入っています。頭を洗ってあげたり、体をふいてあげたりします。 ~中略~

そんなある日のことでした。いつものように一緒に風呂に入り体をふいてあげていると、母は僕の目をじっと見て「ありがとう。ほんまにありがとうね」と言ったのです。その言葉を聞いたとき、思い出したことがあります。母は、僕が6年になる春に倒れました。僕が最初に発見して、すぐ祖母に連絡し、病院へ運びました。意識がなく、危ない状態が続き、祈るような毎日でした。「生きていてほしい。生きていてくれたら、もうそれだけでいい。」僕は心から、そう思っていたのです。一命をとりとめた母を初めて見舞いに行ったとき、母は何もかもが変わっていました。母の脳は7歳になっていたのです。つい先日まで、元気に笑い話していた昔の母はもういない、待っていても帰ってこない、二度と会えない・・・。

それでも、母の顔を見ると、「生きていてくれて、ほんとうによかった。」という思いで胸がいっぱいになって、眠っている母の手にそっとふれて、そのぬくもりをたしかめたりもしました。母に「ありがとう」といわれた瞬間に、倒れている母のまっ青な顔を見たときの胸のとまるような思いや、生きてるとわかったときの安心して涙が出たときの気持ちを思い出したのです。母は、母です。障害をもっている、たった一人の僕の母です。これから先、僕はもっと一生懸命勉強して、福祉についても学び、少しでも何か助けを必要している人たちの役に立ちたいと思います。 ~後略~

## 子どもたちに温かい声がけを

子ども支援センターの業務のひとつに、街頭指導活動があります。その主な内容は、子どもたちが安全で安心して生活できるように、遊技場や集まりやすい場所の見回りをを行い、非行防止に努めています。

センターでは、3人の専任少年委員による市内巡回をはじめ、50人の主任少年委員および380人の地区少年委員により、温かい声がけを中心として街頭指導を行っています。巡回中には、指示的な言葉や命令的、威圧的な声がけはしないようにし、あくまでも子どもたちを見守っていることが伝わるような言動に心がけています。

さらに、ボランティアによる“街かど声かけたい”が各地で結成され、その活動の輪が広がりつつあります。

子どもたちの安全で安心した生活と非行の芽を摘むためにも、身近なところから声をかけていただき、いっしょに子どもたちを見守っていただきたいと思っています。



ゲームセンターなどでの街頭指導

# 青い旅

出雲市子ども支援センターの主な業務

相談活動 子ども支援活動 補導活動  
啓発活動 他機関連携・環境浄化など

場所 出雲市今市町北本町1-7  
(出雲勤労青少年ホーム内)  
TEL 0853-21-4444  
相談電話フリーダイヤル 0120-84-7867  
相談時間 (月~金)8:30~18:00 (土)8:30~17:00  
URL <http://www.city.izumo.shimane.jp>

平成18年(2006)9月

## 子ども達に豊かな体験を

スポーツや勉学に最適の季節となってきました。自然界では、栗を始めとするさまざまな植物が実をつけ、木々が紅葉する素晴らしい時季です。また、各地区では体育会や祭りなどたくさんの催し物が行われます。このような機会に、自然界の豊かな恵みを子どもたちが体感したり、できるだけイベントに参加したりして、豊かな体験を積み、心身ともにたくましく成長して欲しいものです。そのためには親の接し方も大切です。



親(家族)が率先して子どもと行動を共にしていくことです。

今社会では、人(友だち)とつきあうことがうまくできない若者やニートとかひきこもりがちな子が増えてきて、心配されています。それはどうしてでしょうか。ゲーム機器などを使った室内でのひとり遊びが多く、集団での生活が少ないことがその要因のひとつにあげられます。その解決には、親が子どもと共に生活するよう努力し、一緒に喜怒哀楽を体感していくことです。

例えば、野山で紅葉を見かけたら、しばしとどまって、その美しさを堪能することです。このようにして、家族で感動を共にする機会が多いほど子どもの心情が豊かになっていくと思われれます。

普段の生活で子どもが話しかけてきたらよく聞いてやることです。

子どもたちは、2学期の生活が始まり、一日の出来事で嬉しかったことや嫌だったことなど体験を話すと思います。そんな時こそ、親子(家族)のふれあいを深めるチャンスです。「あーそうだったの」とか「それはよかったね」というようによく聞いてやることです。反対によくなかったことやトラブルを起こしたら、それを契機としてよく話し合い、子どもの心情を推察し、心を癒してやることです。

子どもの参加する行事にはできるだけ出席し、その参加状況を認め、ほめるようにしましょう。

子どもたちは園や学校などさまざまな行事に参加する機会が増えます。成績が良かったり、思わぬ結果になったりすることがあります。良い成績を得ると、その良さを認め、ほめられることでしょう。しかし、結果が良くなかった時の対応こそが大切です。状況に応じて「よく頑張ったね。次はきっとやれるよ。大丈夫、大丈夫」というように励まし、元気づけ、次の活動のきっかけとなるよう導くことが大切です。

子どもの頃に多くの経験をする中で、心身ともに豊かな子に育っていきます。やがて、大人になってもその経験が生かされ、良き大人になっていくと思います。